II

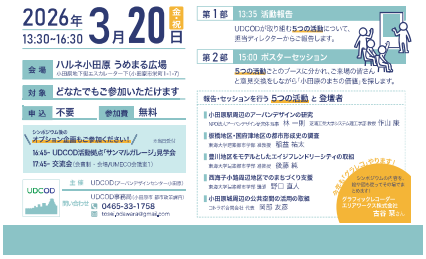
令和7年度UDCOD活動報告シンポジウム

令和７年度UDCOD活動報告シンポジウム

みんなで探そう 小田原のまちの価値

日時：2026年３月20日（金・祝）13:30~16:30

場所：ハルネ小田原 うめまる広場　参加者：約90人



プログラム

開会のあいさつ　13:30

作山 康（芝浦工業大学システム理工学部 教授）

第1部 活動報告　13:40~15:05

❶ ありたい情景スケッチから進めるまちなかのアーバンデザイン

林 一則（UDCODディレクター・NPO法人アーバンデザイン研究体 理事）

❷ なりわいと町並みの変遷 - 板橋と国府津 -

稲益 祐太（UDCODディレクター・東海大学建築都市学部 准教授）

❸ お散歩マップから広がる地域のつながりと支え合い

後藤 純（UDCOD副センター長・東海大学建築都市学部 准教授）

❹ 柔らかいものを集めよう 固いもので痕跡を残そう

野口 直人（UDCODディレクター・東海大学建築都市学部 講師）

猿山 綾花（東海大学大学院 修士2年）

❺ ステキなみちくさ&お金ではなく関わりで育てる場所サンマルガレージ

岡部 友彦（コトラボ合同会社 代表）、齊藤 一樹（コトラボ合同会社）

第1部 活動報告の様子

第２部 ポスターセッション　15:15~16:25

「小田原のまちの価値」

第1部で報告した5つの活動ごとのブースに分かれて「小田原のまちの価値」について、来場者と意見交換を行った。

総括　16:30

杉本 洋文（UDCODセンター長・元東海大学教授）

※グラフィックレコーダー　古谷 栞（エリアワークス株式会社）

第2部 ポスターセッションの様子

オプション企画

●UDCOD拠点「サンマルガレージ」見学会　16:45~17:30

●交流会　17:45~

会場：UMECO会議室1、2

［開会あいさつ］作山康ディレクター

「小田原のまちの価値」を探す

-- 小田原市は全国的によく知られていて、小田原に住みたいというニーズもあります。

では小田原の「何がいいの？」というと漠然としているのではないでしょうか。市民の皆さんは、小田原の魅力を感じていると思いますが、その価値についてしっかりと伝えることができるでしょうか。

-- まちの価値を「ハード」と「ソフト」に分けて考えてみましょう。

「ハード」は、小田原城や新しい再開発ビル、小田原駅、三の丸ホールなど。最近はミナカでの待ち合わせが若い人に人気のようですね。

「ソフト」は、昔から続くお祭りやお花見、食文化、二宮金次郎の報徳思想。なんと言っても温暖な気候風土、海も近い。そして、城下町、宿場町、別荘地などという歴史的な背景を持つ都市のイメージもあります。

-- さて、まちの価値を測る尺度は何でしょうか。

一つは、現在の経済合理主義の中で、数字で表せる「定量的な価値」です。「不動産価値」「居住や店舗、業務の需要」「住みたい街ランキング」「滞在時間」「歩行者交通量」などが考えられます。

もう一つは「定性的な価値」で、心を豊かにする、暮らしを豊かにするための、お金には代えられない小田原の価値です。「誇り」「愛着」などのシビックプライド、「歴史・文化」「美しい風景」「詫び寂び」などがありそうです。

開会あいさつの様子

この「ハード」と「ソフト」との両面から、まちの価値を考えることが重要です。

-- 世界的な傾向としても、新しくきれいなまちばかりが評価されているとは限りません。

例えば、スウェーデンの価値創造を支援する組織が、まちのデザイン原則として「若者や高齢者を受け入れる場所はすべての人に愛されること」「互いに自慢し合える場所をつくること」の重要性を指摘しています。

これまでまちは、主に現役世代の大人向けにつくられてきたのではないでしょうか。これからは、こどもや高齢者から愛されるという視点を大切にしなければなりません。また、小田原の人が互いに「小田原はこれだよね」と自慢し合えること。例えば「小田原でちょうちんはこの形だよね」「風鈴と言えば鋳物だよね」というのもそうですね。

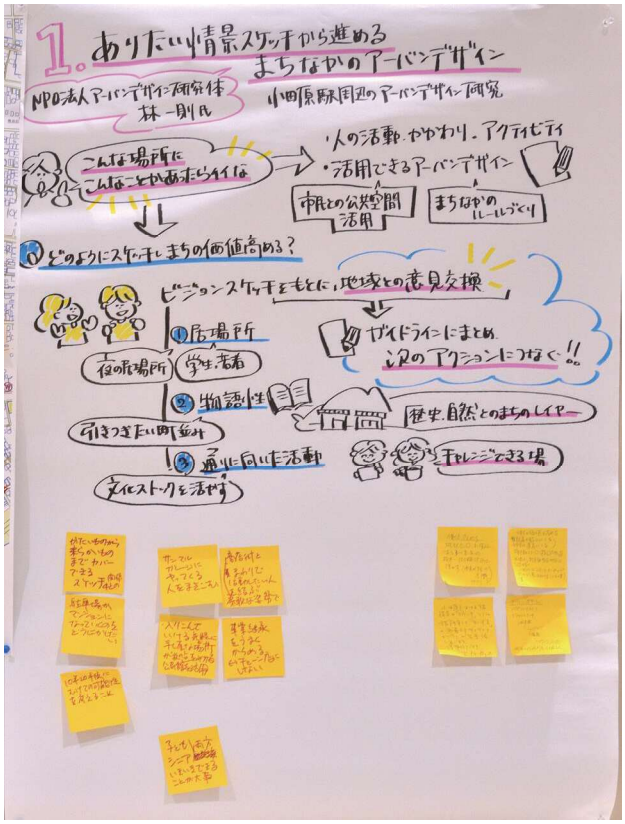
-- UDCODには「こどもや高齢者に愛され」「互いに自慢し合える」魅力的な小田原のまちを、できるだけ見える化する、わかりやすくすることが求められていると考えています。

本日は「小田原のまちの価値」を皆さんと掘り下げていきたいと思います。

よろしくお願いいたします。

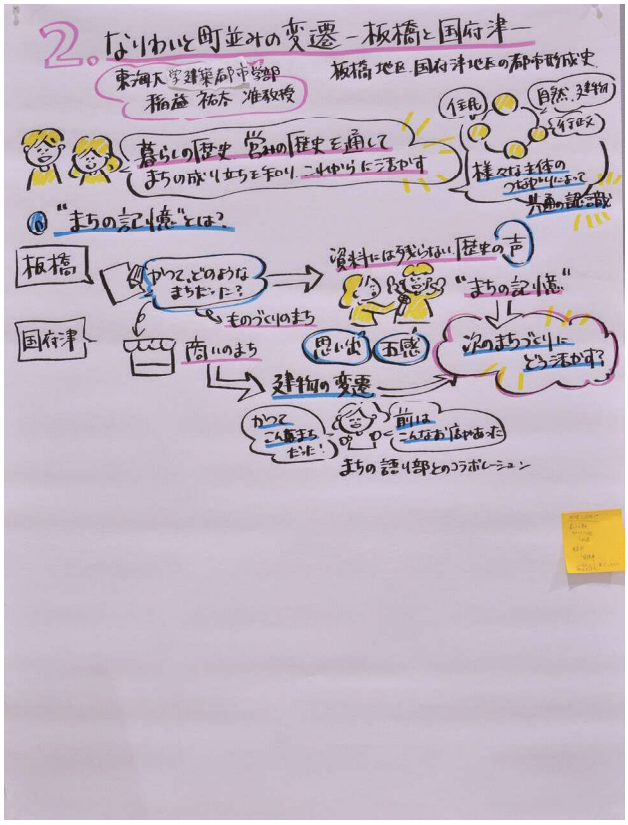
ポスターセッションの概要

※ 模造紙の画像は、グラフィックレコーダーの古谷さんが、
第1部活動報告の内容をその場で記録(グラフィックレコーディング)したもの。



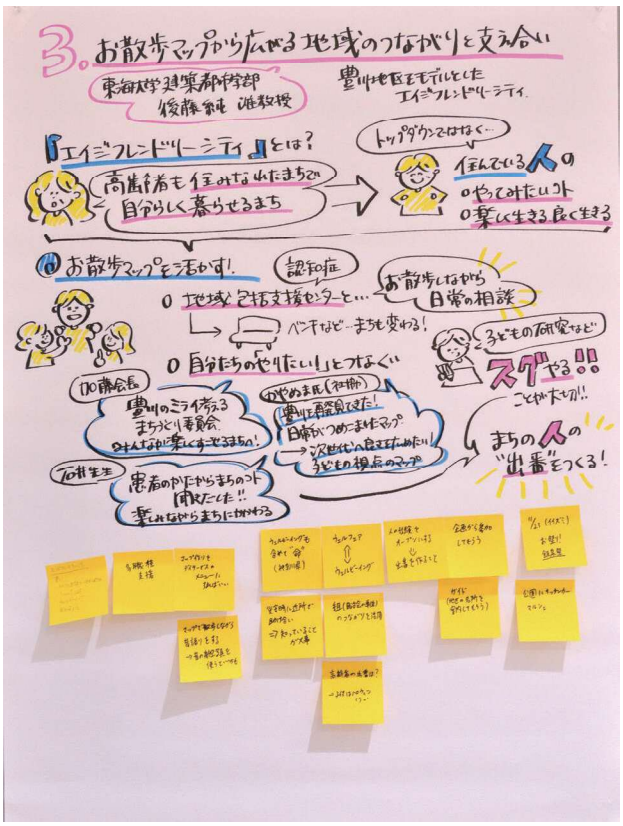
1 ありたい情景スケッチから進める まちなかのアーバンデザイン

- まちづくりの主体を育てる必要があり、サンマルガレージに加えて、地区の公民館のような小さな拠点を生かして担い手の育成を、という話があった。
- 自由に活動している市民の人たちと商店会との間のコミュニケーションをとりながら、お互いに柔軟に活動できるような場をつくっていくべきという意見があった。



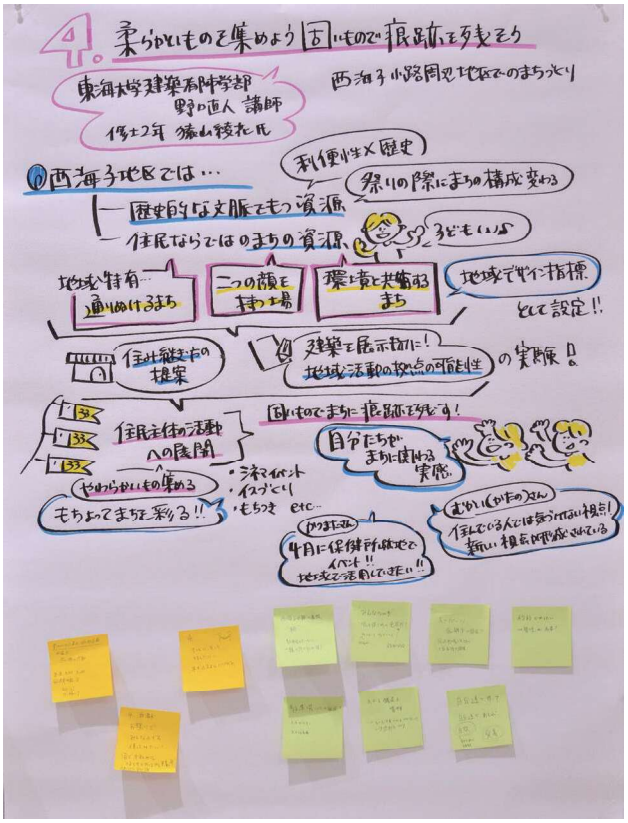
2 なりわいと町並みの変遷 - 板橋と国府津 -

- 板橋でまちの歴史を住民同士が語り合うイベントが行われたが、他の人の話を聞けて楽しかった。次の世代にも繋げるために、思い出話だけでなく現在のまちをテーマに再度開催する案があった。
- 特に、モノづくりを見ることや関係者の話を聞くことを、こどもにも参加してもらい実施できるとよいということになった。



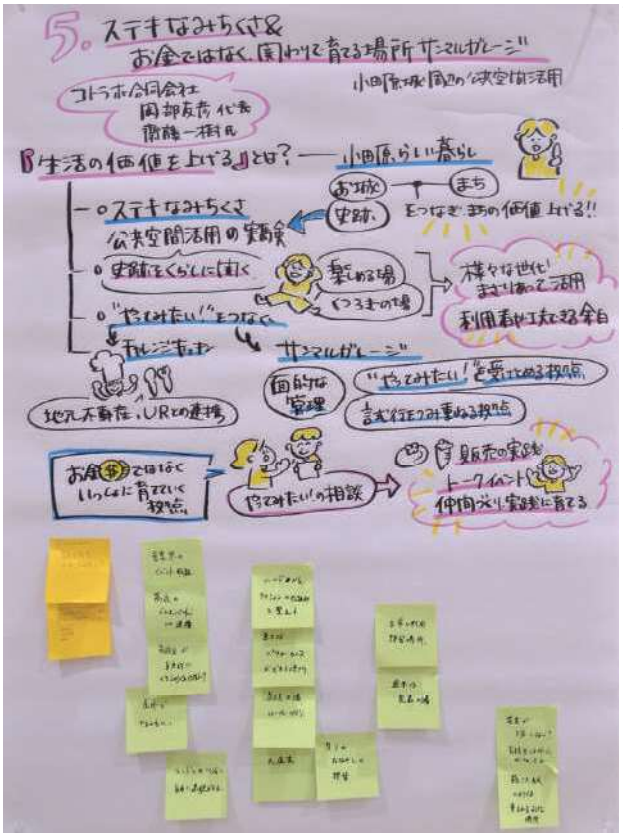
3 お散歩マップから広がる地域のつながりと支え合い

- まちの人の出番を、まちのなかにどのように生み出していけるかを話し合った。例えば、昔語りや自分を語ることは認知症の人も元気になれる役割だという意見があった。
- 豊川を、自分の才能を受け止めてくれるまち、面白い人がみつかり輝くまちにしていくためのきっかけを、UDCODがつくれるとよい。



4 柔らかいものを集めよう 固いもので痕跡を残そう

- 十字地区の皆さんと、住民の自発的な取り組みとして公共空間を活用することについて話し合った。
- 「みんなのいす」の活用や盆踊りの開催などのアイデア、公共空間の管理の課題などが話題になった。
- 用意されたものを使うだけではなく、自分たちで考え、つくり、使うことが重要という話になった。



5 ステキなみちくさ&お金ではなく、関わりで育てる場所サンマルガレージ

●三の丸ホールから、音楽やアクティビティがにじみ出てきたら、もっと居心地のいいまちになるのではないか、という話から具体例に発展した。

●プロでなくてもジャグリングやブラスバンドの練習でもいいと思う。ステキなみちくさの取り組みでも、市民がパフォーマンスをできる機会がつくれたらまちの価値につながるとの意見があった。

シンポジウムのまとめ　グラフィックレコーダー 古谷 栞さん

すでにある魅力を掘り起こし新たな価値付けをする、日常のコミュニケーションなど小さなことから発展させるということが、各活動に共通していて印象的でした。

グラフィックレコーディングの様子

感想のコメント 加藤憲一市長

総括のコメント 杉本洋文センター長

III

UDCODの各ディレクターに、アーバンデザインの視点から捉えた
小田原のまちの魅力や特徴についてインタビューをしました。
聞き手：UDCOD事務局

インタビュー「アーバンデザインで読み解く小田原」

インタビュー「アーバンデザインで読み解く小田原」 vol.1

小さな単位でまちを捉えて資源を見つけ出し、実装・体験で伝えたい

西海子小路周辺地区のまちづくり支援
ディレクター：野口 直人

Q1.アーバンデザインの視点から捉えた、西海子小路周辺地区の魅力や特徴は

A.①小さい単位でまちを見る

UDCODでは、まちづくりの相談があるからちょっと話を聞いてもらえないか……ということで、西海子（さいかち）小路周辺地区に関わることになりました。

まず、西海子という名前が面白くて興味を持ちました。どのまちに関わるときも、実際に現地を訪れる前は何もなさそうだなと思うのですが、どのまちでも面白さや独自性、すごくマニアックな文化などを見つけられます。

まちには、小さい単位で見ると必ず特徴があります。最も人が把握しやすい環境の単位は、半径何メートルなど数値で語られることが多いですが、私は肌感覚で捉えています。西海子地区でいうと西海子小路を中心に国道1号から海までの範囲。親がギリギリ心配しないで子どもを遊びに行かせることができるくらいかな。その中でいろいろなものを見ていったら、西海子はとても色鮮やかでした。

②「通り抜け」は西海子の魅力の一つ

文学館は、西海子公園という名前の公園でもあるということですが、普通に公園を整備したらこうはならないですよね。うまく環境を読み替えるというのが、無意識にできているのだと思います。公園だから自由に入って来ることができる。そして、通り抜けができます。西海子には他にも、通り抜けができる場所や抜け道のような路地があります。地域住民の皆さんが、これを特徴と思っていないところがいいのでしょうね。当たり前にある、習慣として通り抜けている感じです。

通り抜けができないと行き止まりの空間になってしまい、人が入ってこなくなります。「便利だから使う」でいいと思います。通り抜けが寄り道につながり、まちを味わう歩き方をさせます。目的がないと行かないというのは、まちとして多様性に欠けてしまい、もったいないですね。「通り抜け」って奥深いと思います。

③2つの顔を持つことと余白があること

「文学館であり、公園でもある」「見慣れたまちかどが、祭りの時には全く違う使い方をされる」といったように、1つの場所に2つの顔があることも重要です。文学館を例にすると、文学館として訪れる人だけでなく公園として訪れる人もいる。それによって、その場所の「敷居が下がる」（関わる人が増える、関わりやすくなる）と考えています。

2つの顔を持つためには、まちの中に余白（建物が立っていない部分）があることが重要です。西海子

地区内の舗装されていない部分をプロットした図（「西海子の帰路ver.2」より）

には余白が多く残されていますが、その余白が舗装されず地面がむき出しになっていることも、面白いですね。

④西海子のゆるさ

西海子には、ガチガチではない「ゆるさ」みたいなものも感じます。

以前インタビューをさせていただいた、80～90代のおばあちゃんが「昔はお屋敷の庭に忍び込んで遊んでいた」とお話しされていました。そういった「ゆるさ」が、今も違った形で残っていると思います。

例えば、住宅の塀やフェンスが少なかったり、共同で駐車場を持っていたり。もちろん防犯対策は必要ですが、私有地に対する意識の、いい意味での「ゆるさ」を、デザインに上手く組み込んでいけたら面白くなりそうだなと考えています。

でも、建築ってある意味で線を引くことなんです。壁の位置とか、内と外とか、ルールとか。デザインは境界をつくってしまいます。そこをどう弱くしていくかを建築の人は常に考えています。

私は、猫みたいにまちを歩けたら面白いと思っています。どこでも入り込んで塀を乗り越えたりくぐったり。おそらく、猫が認識しているまちと、人間が認識しているまちは全然違っているのではないでしょうか。猫になれば、今まで出会わなかったものに出会えそうな気がします。

こどもたちは、猫に近いことができるのではないかと思い、2024年度の取り組みで、こどもたちにまちの中の宝物を探してもらいました。

まちの宝物探し「西海子探検隊」

Q2.西海子では、今後どんなことに挑戦したいですか

A.市民のみなさんがまちづくりのキャスト

2024年度の取り組みを通して、短期間でも規模が小さくても実装することには価値があると実感しました。

これからの取り組みでは、冊子「西海子の帰路ver.2」で提案した地域デザイン指標を、体験してもらえるようなことがしたいですね。

2025年3月15日に開催した「西海子の帰路展」で展示した、西海子の日常と非日常を交互に紹介する動画を、地域の皆さんが「私が写っている」と喜んでくれました。展示を自分ごとと思ってくれたんです。

それを見て、まちづくりとか地域デザインというと、全然違うレベルで上から考えているように思われがちなので、地域の皆さんがまちづくりの物語のキャストになるようなことをできたらと考えています。

旧松本剛吉別邸を主会場として開催した「西海子の帰路展」

旧松本剛吉別邸の窓枠に地域の写真をはめ込み展示した

インタビュー「アーバンデザインで読み解く小田原」　vol.2

住民の「やってみたいこと」から始める、価値観の多様化に対応したまちづくり

エイジフレンドリーシティー研究
ディレクター：後藤 純

Q1.ご専門を教えてください

A.都市計画とまちづくりを一体にして考える

私の研究分野は「まちづくり」です。まず、まちづくりの主体は誰なのかを整理すると下の図のとおりです。「都市づくり」について、自治体行政が行うものを「都市計画」、民間企業が行うものを「都市開発」、市民社会組織（NPO、町内会等）が行うものを「まちづくり」と定義します。

1960年代までは、「都市計画」も「都市開発」も住民が切望するニーズに応えてきました。郊外住宅地を開発したことで、多くの人々が戸建て住宅を持つことができました。住宅が持てれば、次は公共施設です。学校や病院などの都市施設の整備も進みましたし、高速道路等ができて病院までの到着時間が短縮されるのは住民の希望だったと思います。このように衣食住が足りて、生活に余裕が出てくれば、まちの賑わいなどを求めて中心市街地が整備されていきました。

同時に、反対運動に端を発して、住民による「まちづくり」が誕生しました。都市計画や都市開発の問題点を指摘しつつ、身近な生活環境を改善していく取組です。人々の生活が豊かになれば、それに呼応するように価値観も多様化します。住民は画一的なサービスでは満足しないし、行政も多様化するニーズに応えきれなくなります。

そこで必要になるのが、住民主導でもう一度地域を見直していきながら、都市計画とまちづくりを一体にすることだと考えていますが、今「まちづくり」がしづらくなっている状況があります。

	選挙で選ばれた人	選挙で選ばれていない人
公益の追求	政府セクター	市民社会セクター
私益の追求	ー	民間セクター

まちづくりの主体

Q2.今「まちづくり」がしづらくなっているのはなぜでしょうか

A.①まちとの関わりしろとなる「余白」が減っている

理由は2つあると思います。

1つは、行政がこれまで増え続ける幅広いニーズを政策として取り上げてきた成果として、地域住民が団結して何かに取り組む必要性が薄れてきたことではないでしょうか。

例えば、放課後のこどもたちの支援も、昔は子ども会などが対応していましたが、今は学童保育事業により行われるようになりました。

住民にとって、まちづくりの関わりしろとなる「余白」がなくなってしまったことで、「まちづくり」がしづらくなっているということです。

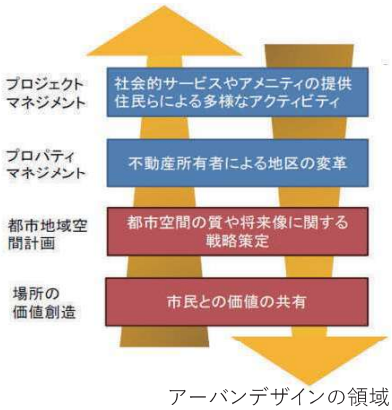
②行政が「まちづくり」への関わり方に悩んでいる。

もう1つの理由は、行政としても現代的な地域のまちづくりにどのように関わっていくのか分かりづらくなっているということです。

従来のまちづくりでは、行政のコミュニティ施策は、地域を1つにまとめる方法で進めてきました。行政としては、地域が1つにまとまってくれている中で、住民の信頼しているリーダーが選ばれて、行政と地域のリーダーとで調整ができれば、公共サービスが隅々まで行きわたるという前提がありました。

しかし今では、地域が1つにまとまるテーマが少なくなっていて、多様な価値観のある人たちを住民自身がまとめていくことも難しくなってきていると思います。

そこで、別の方法として、地域を無理にまとめることは諦めて、ワークショップの参加型の場に集まってもらった個人や団体と直接連携し、公共サービスを進めていくというものがあります。この場合、行政には、



アーバンデザインの領域

単なる調整のみではなく、現地に入って関係づくりからフォローアップまでを行うコーディネーター人材を増やすことが求められます。

Q3.まちづくりにおけるアーバンデザインの役割は何でしょうか

A.①まちづくりの総合調整

私はアーバンデザインを右上の図のように捉えています。考え方のベースには、まず市民の価値観が大切で、それをどう育てていくのか。その上で今ある地域資源をどうやって使っていくのか、まちづくりの戦略を立てる必要があります。

さらに上に、不動産オーナーが自分たちの資産をどううまく使っていくのかというプロパティマネジメント。そして、テナントコントロールやイベントなどのプロジェクトマネジメントがあります。

アーバンデザインは、建築や空間などを個々にデザインするのではなく、この4つの層全体をトータルに扱い、まちづくりの総合調整をする役割があります。

②生活者の目線でまちをつないで考える

アーバンデザインを考えるとき、「生活者の目線でまちをつなぐ」という視点が不可欠になります。

例えば、高齢者が自宅を出てバス停に着くまでに、歩道は狭くて道がガタガタしていて歩きづらく、やっとバス停に着いたと思ったらバスが1本行ってしまったとか。バス停に屋根がなかったら、夏場は暑いのにどうするのかというように、まちと人、都市と生活者をつなぐ視点がないとバスがあっても利用のハードルが高くなって、移動範囲も狭まり、人がまちとつながりにくくなってしまいます。

エイジフレンドリーシティの研究でも、「超高齢社会」をテーマとして、自然環境や交流の場、人材などの地域資源をどのようにつなぐことができるか考えています。

Q4.豊川地区でのエイジフレンドリーシティの研究ではどんな点に着目していますか

A.「豊川地区でやってみたいこと」から始める地域づくり

昔は人と人との関わりが生活の中に自然と溶け込んでいましたが、今は人々の行動パターンが、個人の興味や関心に基づく活動に変容し、従来通りの地域の支え合いではうまくいかなくなってきています。「つながりたいけど、しばられたくない」という思いを考慮しながら、集まって暮らす人々の密度が下がっても幸福に暮らせるような新しい社会像が求められていると感じています。

豊川地区では、住民の皆さんが地域で「やってみたいこと」をきっかけに、お散歩マップづくりなどの活動を通じて、担い手の掘り起こしや居場所づくりを行っています。

研究を通して、人材の豊かさが小田原の魅力だと感じています。住民の皆さんが、自分たちのまちについての考えをお持ちになっていて、プライドを持って地域に関わられています。地域への想いを引き出しながらまちづくりを考えていくことが求められていると思いましたね。

地域における「やってみたいこと」から、興味のある人同士がつながって、まちのデザインが新しいケアの手法となるように、これからも引き続き取り組んでいきます。

豊川小学校で開催した地域のお散歩マップづくり(2025年4月13日)

小学生から大人までが豊川地区内のお散歩コースについて話し合った

インタビュー「アーバンデザインで読み解く小田原」 vol.3

まちの歴史と骨格を大切に「場所性の豊かさ」を伸ばしていく

UD(アーバンデザイン)研究
ディレクター：林一則

Q1.どのように都市デザインに関わられてきましたか

A.①時代ごとの要請に応じて取り組んできた都市デザイン

若い頃は建築設計の仕事が中心でしたが、都市デザインや地域まちづくりのお仕事をいただく機会がだんだん増え、実務家として、都市デザインの仕事をかなり長くやってきました。

特に横浜市の都市デザインには、長く関わっています。横浜市が都市デザインに取り組み始めた当時(1970年代～80年代)、市役所内部の専門家も少なく、また協力できる専門家を育成する視点からも、私たちのような都市デザインを扱う事務所と一緒に仕事をしていたようです。私の初仕事も横浜で、金沢海の公園のプランニングでした。事務所には、都市計画マスタープラン、景観、公共用地の活用、まちづくりの仕組みづくりなど、その時代ごとのテーマで、都市デザインに関する仕事が持ち込まれました。

ニュータウン開発の仕事をきっかけに、造園、ランドスケープ、環境保全生態学の専門家との繋がりができて、里山保全再生など自然系のまちづくりに関わることも増えました。横浜でも1990年代頃は、自然を生かしたまちづくりや川を再生しようという話が増えて、川沿いの遊歩道を設計したりしましたね。

この頃には、住民ワークショップなども行われるようになり、住民を巻き込んで、どう使ってもらうか維持管理をどうするか一緒に考えました。

②アーバンデザイン研究体の活動

30代の頃に、同世代の若手専門家で集まって「アーバンデザイン研究体」を立ち上げました。設計事務所、コンサルタント、行政などそれぞれの場所で実務担当をしていたメンバーで、情報交換をしたり、様々なまちを見に行ったり、東日本大震災の復興のお手伝いをしたりと断続的に活動してきました。

ここ10年ぐらいは、横浜の防火建築帯の再利用などの働きかけの活動もしていました。防火建築帯は、空襲で焼失した横浜の戦後復興の中で、延焼防止帯となるように街区を囲むコンクリ長屋を、複数の地主さんが共同し、つなげて建てたものです。3～4階建てで、1階は商店など、2階以上はアパートでした。これを、関内関外地区のまちなみを特徴づけた資産として改めて注目してもらうように、防火建築帯を紹介する本の出版や、学生とリノベーションした建物で展覧会を開催するなどしました。

そして、このアーバンデザイン研究体に参加していたことが、今回UDCODに加わるきっかけにもなりました。

1954年竣工「弁三ビル」。
1階は店舗、2階以上が住宅という防火建築帯の典型的な構造となっている。

Q2.アーバンデザインの視点から、小田原の特徴や魅力を教えてください

①「場所性が豊か」なまち

「アーバンデザイン研究体」には、UDCODの杉本センター長や、アーバンデザインセンターの生みの親であり小田原市政策総合研究所※1の研究顧問でもあった故・北沢猛さんも在籍していましたので、小田原は何度か見学に来たことがありました。UDCODの立ち上げの話が出てからは、かなり頻繁に小田原を訪れていますが、それでも来るたびに発見がありますね。

それは、歴史と都市形成のプロセスがあるまちだからだと思います。新しく一気につくってしまったまち、戦後あまりにも整備され過ぎてし

まったまちだと、ある意味綺麗でも面白くないところがあります。それに比べると小田原の町は、味わい深いというか、奥が深いというか「場所性が豊か」なまちですね。

※1 平成12年に設立され約8年間活動した自治体シンクタンク。

②歴史の積み重ねによってつくられた場所性の豊かさ

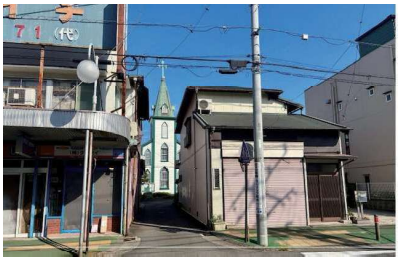
「場所性が豊か」というのは、ちょっとした街角でもそれぞれの特徴がある、背景に山が見える通り、潮風を感じる道、角を曲がると特徴的な建物が見えるとか、まちの中に色々なところがあって面白いということです。

もちろん、活気だとか賑わいだとか、そういうことも必要でしょうけれども、長い目で見ると「場所性が豊か」であることが、まちにとっては重要だと思います。「場所性が豊か」になることで、まちと人々の関わりしろ、つまりまちと人が繋がる手がかりが増えるからです。

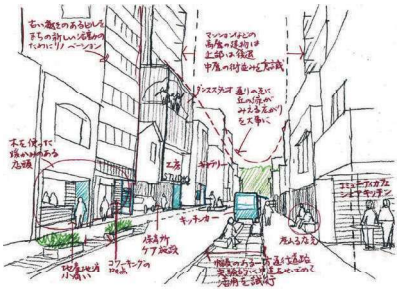
色々な場所があることで、ちょっと気に入っている場所、散歩するならこの道、こんな場所もあったんだなど、それぞれの人が自分にとってのまちとの繋がりを見つけやすくなります。一気に整備されたまちは、完成した時には関心を集めますが、あまり自分のものにならないような感じがしますよね。小田原は、その時々に先人たちがやってきたことの積み重ねで今のまちになっている。だから色々な場所があって手がかりが見つかりやすい「場所性が豊か」なまちになったのでしょう。

ちょっとした街角に光を当てて、個性を伸ばしていくようなまちづくりをやっていけたら、より「場所性が豊か」なまちになっていくと思います。

リノベーションにより魅力的な街角が生まれてきている



奥に教会が見える印象的な路地



UDCODメンバーで検討したまちの将来像のスケッチ（作図：林さん）

Q3.小田原の都市デザインを考える上でヒントをいただけますか

A.まちの歴史と骨格を生かす

城下町では、昔からの旧中心部がありますよね。小田原駅周辺で言うと旧東海道沿いですね。

鉄道が通る時には、旧中心部には難しいので離れたところに駅がつくられてきました。そうすると、駅の方が開発されていき旧中心部の性格がわかりにくくなるということが、全国的にありますね。

でも、まちにとっては旧中心部がルーツなので「重要な場所だよ」という意識を大切にしていった方がいいと思います。

また、小田原駅周辺では、南北の通りが主軸になるのは間違いないのですが、地元の人にとっては、東西の通りが面白くなるといいのではないでしょうか。住民や職場のある方でしょうか、東西の通りも結構人の流れがある印象です。 若い人がカフェを始めていたりと、すでに動きがあると思いますが、3～4軒くらいの小さなまとまりで面白いものができてくると通りの性格ができてくると思います。

このように、まちの歴史や骨格を生かしてまちづくりを考えていくことが大切です。それが「場所性の豊かさ」を伸ばすことにもつながります。

インタビュー「アーバンデザインで読み解く小田原」 vol.4

エリアごとの個性を読み解き、群島のような小田原の全体像を捉える

都市形成史研究
ディレクター：稲益祐太

Q1.都市形成史は、どのような研究ですか

A.①都市が作られてきた過程から、特徴を明らかにする

都市がどのように作られてきたのか、その過程を解き明かすのが、私が専門としている都市形成史という研究です。

ほとんどの都市は、一時期にすべて完成したのではなく、長い時間をかけて段階的に作られ今の姿になっています。その積み重ねが混ざり合った状態なので、この建築様式、この路地の作り方、この街区の作り方はどの時代の特徴だろうかということを、一つずつ紐解いていきます。

同じ時期にできた城下町であっても、その後の発展の過程はそれぞれ違います。発展過程の重なりが都市の個性を作っていくので、都市形成史は、都市の特徴を明らかにする研究ということになります。

②誰もが都市の形成を担っている

主にイタリアの歴史的な都市を研究しています。組積造の文化ということもあり時代の積み重ねが目で見てわかりやすく、研究を通して、長い時間をかけて都市が出来上がることの魅力を感じました。

都市は、著名な建築家やデザイナーだけが作っているのではなく、各時代の人々が手を加え多くの人の手で作り上げた結果です。誰もが都市を作り上げるメンバーの一人であって、間接的にでも美しい都市を作ることに携わっていると言えると思います。

プーリア州バーリ市の旧市街

Q2.美しい都市とは?イタリアと日本の違いは?

A.①「ビューティフル」と「クリーン」

イタリアと日本とでは、美しさの基準が違っているように感じることがあります。

日本の場合は、美しい都市、綺麗なまちというのは「清潔」つまり「クリーン」であることを指すことが多いように思います。しかし、イタリアの場合は「ビューティフル」。ボロボロで汚れていても、その時代にしかできない建築であれば、それは美しい芸術作品となる。だから、ボロボロなら修復すればいい、汚れているなら綺麗にすればいいという判断がされやすい。「クリーン」が基準の場合は、ボロボロで汚れてしまったら価値がないので、壊して新しくしようとなりやすいですね。

②長編物語のイタリア、短編小説集の日本

イタリアにも人口増加に伴い新しく作られた郊外住宅街があり、日本とあまり変わらないまちなみです。

日本との違いは、「ビューティフル」な古いまちの中心部には手を加えない判断をしていることです。もちろん建て替えもあるのですが、一気に更地にすることはなく、新旧が混在しています。

日本の場合は、古いまちをリセットして「クリーン」にしてきたので、歴史の積み重ねを感じづらくなっています。もちろん「クリーン」は素晴らしいことで、イタリアは汚くて嫌になることもあるんですけどね。

イタリアの都市は第1章、第2章と物語がずっと続いていて、日本の都市は短編小説集のような印象です。

建物の修復は都市再生の重要な手段（足場が掛けられ改修工事が行われている）

Q3.小田原には、どのような特徴がありますか

A.①多様でミステリアス

小田原は日本の同規模の都市の中でも、様々な歴史が混在して残っているまちだと思います。

小田原城のイメージが強いですが、それだけではなく、明治以降の発展の過程、鉄道の歴史、箱根とのつながり、一次産業の歴史など、少しずつ残っています。そしてなにより、産業があり、なりわいが根付いています。

私は、都市は生産と消費の両方がある方が魅力的だと思っていますが、小田原には両方あります。消費だけに特化した場所になってしまっている都市は、刺激的ではあるけどどこか退屈です。

小田原には、歴史に加えてこのように様々な要素があること、この多様さこそが魅力です。「城下町」などの一つの言葉で語るのではなく、時代の積み重ねの上になりわいや暮らしが続いていること、まちが生きていることを伝えられるといいのではないでしょうか。

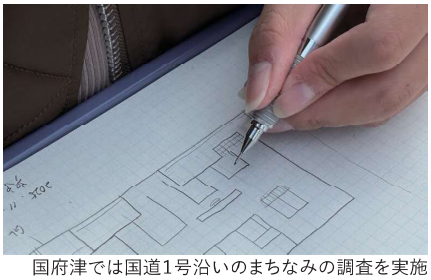
ミステリアスで多面的な人って魅力的ですよね？まちも同じだと思います。

②群島のような小田原

UDCODの活動では、現在、板橋エリアと国府津エリアを対象に研究しています。また、少し前の歴史の方がまちの中に痕跡を見つけやすく、市民の皆さんに身近に感じていただきやすいので、近代の歴史、特に昭和の変化に着目しています。

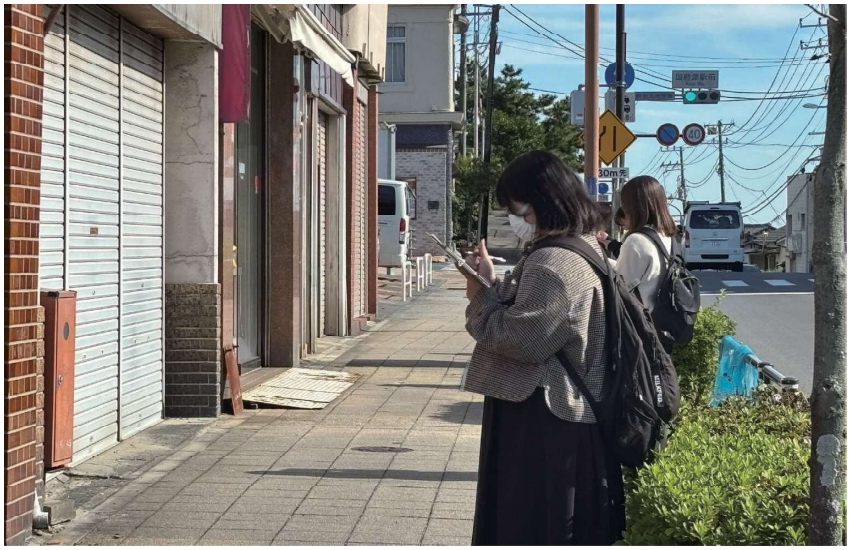
あえて中心部ではないエリアを選択したのは、小田原が群島のように見えたからです。小田原には、城下町だった中心部以外にも、閑静な住宅街、港町、農村など異なる個性を持つエリアが点在しています。これらのエリアがそれぞれ小さな島で、その島々が関係しあい、小田原という群島を形成しているかのようです。

小田原は多様なだけに全体を捉えにくい面もありますが、一つ一つの島の特徴を分析することで、小田原という群島全体の特徴を解き明かしたいと思っています。



国府津では国道1号沿いのまちなみの調査を実施

板橋の非日常、板橋地蔵尊大祭の様子を調査



建物を一軒一軒、東海大学の学生がスケッチし現状を記録

インタビュー「アーバンデザインで読み解く小田原」 vol.5

小田原らしい「まちづかい」を市民の皆さんと見つけ、可視化したい

都市空間活用
ディレクター：岡部友彦

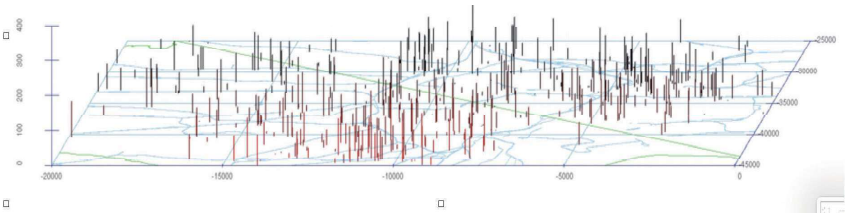
Q1.どのような視点でまちづくりに取り組んできましたか

A.①都市の息づかいを可視化する

建築を学ぶ中で、大学院生の時に「都市様相」という研究に出会いました。

「都市様相」は、音や匂い、雰囲気などを含めた都市の息づかいを、データを使って可視化しようとする研究です。都市を1つの生き物と見立て、いわゆるビッグデータを使って分析します。例えば、東京23区のコインパーキングの空車情報をインターネット上で5分ごとに収集するプログラムを組み、1週間分のデータを集めて、地図上の各駐車場の位置に収集したデータを棒グラフで表示します。それを順番に表示していくと、棒グラフが脈打つように動きます。日中に混雑するエリア、反対に夜が混雑するエリアなど、時間帯や曜日、立地による変化を可視化して分析するわけです。

「都市様相」の研究を通して、雰囲気などの目に見えないものも含めて、地域やまちという単位で考えることに興味を持つようになりました。



「都市様相」の研究で作成したコインパーキング混雑状況のグラフ

②まち単位でのコトづくり

卒業後は、横浜の寿町地区など実際にまちづくりに関わる中で、まちという1つの単位に対して何を変えると人の流れができるか、状況が変わるかを考えてきました。

まちの課題を解決するためには、建築などのモノを作ることだけではなく、コトづくり、つまりコミュニティのデザインや「都市様相」の研究を通して考えてきたまちの雰囲気など、目に見えないものも一緒に考えていく必要があるのではないか。それを、まちや地域を単位にしながら取り組んでいくことが大事ではないかなと思っています。

Q2.小田原の魅力や特徴を教えてください

A.①プレイヤーが集まるまち

やはり小田原は、まちのポテンシャルはすごくあると思います。歴史的な文脈、新幹線駅があり箱根が近いという立地的な資源、さらには山・海という自然もあって、非常に可能性を感じました。

また、空き家があるということも、私は価値だと思っています。更地にされて駐車場ばかりになっているまちも結構多いですよね。そういう中で、小田原では、更地にならずに建物として活用できる可能性が残っていると捉えています。

そして何より、小田原にはまちづくりのプレイヤーの方々がいらっしゃるので、私自身も一緒に取り組めたらすごく面白そうだなという期待があります。

移住してビジネスを始めている人も多いですよね。自分でビジネスを始めるような人が移住したいと思える魅力があるのだと思います。時間の流れが少し緩いというか、豊かというか、そういうところが魅力的なのではないでしょうか。東京では、家賃が高かったりしてランニングコストが大きくなる分、ガツガツ働く必要があります。そういった面で、小田原では少しゆとりが生まれるのかもしれません。その上で、先ほどお話しした小田原のポテンシャルがあって、さらに、徒歩圏、自転車圏で仲間づくりができるような完全な車社会ではないことが、選ばれる理由ではないでしょうか。

②普通のまちにはあるものがない？

小田原に関わるようになって疑問に思ったことは、小田原駅から南のエリアにはこども向けの公園がとても少ないことでした。

お城や神社仏閣が遊び場として機能していたのかなとか、遊園地や図書館が城内にあったことからもお城は市民のための空間としての要素が強かったのかなとか、かつてのまちの使われ方を想像しながら背景を考えているところです。

小田原は、お城などの普通のまちは持っていない資源がある一方で、普通のまちに当たり前にあるものがない、ということも一つの特徴であり隠れた課題でもあるかもしれません。

Q3.小田原では、どのようなことに取り組みたいですか

A.①「まちづかい」が重要

小田原に限らないことですが、「まちづかい」という言葉を作っていくことが大事だなと思っています。

昔は、水を汲むついでに井戸端会議をしたり、商店街で買い物がてらご近所さんと立ち話をしたり、生活がまちの中に広がっていました。そうすると、自然とまちを使う意識が生まれるだろうと思います。この100年ぐらいでこういったものが極端に減ってしまったのだと思います。生活は自分の家の中で解決できて、自己完結、自己責任。家の外のことは行政の責任。という切り分けがされてきてしまった。

生活者自身が、自分の家の中だけではなくて、まちをどう使えるか「まちづかい」がどれだけ上手くなるかが、豊かな暮らしのために重要だと思います。

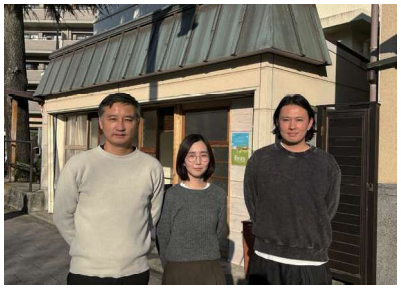
「ステキなみちくさ」弁財天通りの史跡整備予定地の様子。おもちゃなどを置いて広場の利用を促している

②小田原らしい「まちづかい」を市民の皆さんと見つけたい

小田原では、お祭りの時には人々の活動が路上へとにじみ出して、すごく上手にまちが使われていると思います。日常的な使い方はまだ見えてこないですが、おそらく潜在的な小田原らしい「まちづかい」を持っているのではないでしょうか。

小田原城周辺で公共空間を活用する実証実験「ステキなみちくさ」に取り組んでいます。この取り組みを通して、市民の皆さんと一緒に小田原らしい「まちづかい」を見つけ、可視化していきたいです。

都市のタイムスパンは100年、200年、500年、1000年と人間よりも長いですから、急激には変わりません。長期目線でじっくり取り組む必要があると思います。



お堀端通りに設置した取り組み拠点の前で岡部ディレクターとスタッフ

インタビュー「アーバンデザインで読み解く小田原」 vol.6

「骨格」が美しい小田原の、隠れた魅力を見つけ出しプロモーションする

UD（アーバンデザイン）研究
ディレクター：作山康

Q1.ご専門を教えてください

A.①アーバンデザインの外科医から内科医へ

都市計画、エリアマネジメント、都市経営などアーバンデザインに関連する業務に幅広く携わってきました。

学生時代は、建築設計の研究室に在籍しましたが、100人、1000人に一人の特別なクライアントのための建築、設計者が表現したいものを作る建築には違和感を覚えていました。単体としてかっこいい建築であっても、それが本当にその場所に合っているのか、ということに興味を持ち、都市計画関係のコンサルタントに就職しました。

当時の日本には、アーバンデザインとして都市空間を総合的に考える仕事はほとんどありませんでした。都市計画マスタープランなどの「土地利用」、土地区画整理事業などの「市街地開発事業」に関する仕事が多かったですね。

徐々に公共空間のデザインも重要だという考え方が広まり、橋や道路、広場、公園など土木分野のデザインで「都市施設」にも関わるようになりました。日本の都市計画の3要素である「土地利用」「都市施設」「市街地開発事業」すべてを範ちゅうとしている専門家は少ないかもしれません。最近では、これらの手法はまちづくりの主流ではなくなり、「都市経営」つまりどうやって都市の価値を高めるかといった仕事が増えています。

大学教員となってからは、人間が幸せになるための「well-beingなまちづくり」を研究テーマとしています。埼玉県上尾市の原市団地内に私が在籍する芝浦工業大学が設置したサテライトラボでは、学生たち自らが地域住民のwell-beingを考え、現場で課題を見つけ、その解決方法を探る活動を行っています。

②アーバンデザインの外科医から内科医へ

まちづくりのトレンドの変化とともに、土地利用や設計などの「外科」的な領域から、都市経営やウェルビーイングのような「内科」的な領域に私の活動の重心は移行しましたが、アーバンデザインの専門家として、内科的な取り組みでも空間にこだわることを大切にしています。

【サテライトラボ上尾の取組例】高校生も参加してe-スポーツを通した多世代交流の可能性を検討

【サテライトラボ上尾の取組例】環境フィールド学習の一環として多世代交流とみんなの居場所イベントを開催

Q2.小田原の魅力や特徴を教えてください

A.①まちの「骨格」の美しさ

歴史に裏打ちされた「骨格」の美しさが、小田原城周辺のまちの魅力であると感じています。

小田原のまちの「骨格」は、お堀や小田原用水（早川上水）、西海子（さいかち）小路に残る武家屋敷地の面影、町割り※1、散在する寺社の配置などに痕跡を見ることができる、城下町としての空間構成が基礎となっています。

※1 町割り：まちを街路や水路で区画すること、区画の中の敷地割

宅地内の緑や長い塀、閑静な雰囲気に武家屋敷地の面影が残る西海子小路

②「骨格」を使いこなすことで、美しさが際立つ

まちの「骨格」を美しく際立たせるためには、文化の厚みが欠かせません。

城下町がつくられた場所は、たいてい地形がよく人が住みやすい場所ですので、古くから人の営みがあります。1000年都市と言われる小田原もそうですね。住まい手が長く都市生活をしてきたその中で、漆器や鋳物、和菓子などの伝統文化、小田原らしい気質などの地域性も含めた文化の厚みが生まれ、「骨格」を使いこなしてきました。

住まい手が使いこなすことによって「骨格」は、美しく際立ちます。

Q3.小田原の魅力を生かすために、どのようなことが必要ですか

A.隠れた魅力を見つけ出し、プロモーションする

小田原は歴史が長いまちのみが持ち得る「骨格」の美しさが魅力ですが、一方で、歴史が長いまちゆえに、特徴がわかりにくいという面もあります。

日本の主要都市の多くが近世の城下町ですが、小田原はそれ以前からのまち。他都市よりも多くの歴史の層（レイヤー）が積み重なっているので、特徴を読み解くことが難しいのです。だからこそ、小田原には、まだ解き明かされていない隠れた魅力があると私は考えています。

隠れている魅力を見つけ出すためには、私たちのような外から来た「風の人」の視点とアーバンデザインの視点が必要です。

まちを読み解き魅力を明らかにして、市民の皆さんにわかりやすく伝えること、そして市外に向けてプロモーションしていくことは、UDCODの重要な役割の一つだと考えています。

UDCODでの議論の様子

令和７年度スタッフ

2026.03.20　シンポジウム参加者の皆さんと

センター長　杉本 洋文・元東海大学教授

副センター長　後藤 純・東海大学建築都市学部 准教授

都市空間活用担当理事　信時 正人・(一社)UDCイニシアチブ 理事

UD研究

ディレクター：杉本 洋文、作山 康・芝浦工業大学システム理工学部 教授、林 一則・(特非)アーバンデザイン研究体 理事
研究員：五十嵐 敦子、中津川 毬江、梶村 駿介、吉澤 元克、細谷 夢津美

都市形成史研究

ディレクター：稲益 祐太・東海大学建築都市学部 准教授
東海大学 建築学科：大澤 那摘(3年)、天井 かのん(3年)、平川 真優(3年)
(特非)小田原まちづくり応援団：池田 啓司

エイジフレンドリーシティ研究

ディレクター：後藤 純
東海大学大学院 建築土木学専攻：長岡 拓(2年)、生島 駿大(2年)、五十嵐 日向子(2年)、中村 広幸(1年)
安保 創晟(1年)、岩下 勇斗(1年)、山岸 未侑(1年)
東海大学 建築学科：廣瀬 美紅(4年)、助川 麻美(4年)

西海子小路周辺地区のまちづくり支援

ディレクター：野口 直人・東海大学建築都市学部 講師
東海大学大学院 建築土木学専攻：猿山 綾花(2年)、田中 大輝(1年)、鎌田 美春(1年)、吉田 奈央(1年)
東海大学 建築学科：山口 萌子(3年)、古越 佑奈(3年)

都市空間活用

ディレクター：岡部友彦・コトラボ合同会社 代表
コトラボ合同会社：齊藤 一樹、佐藤 絢香

事務局（小田原市都市政策課）梶塚 毅、吉澤 元克、山口 洋平、細谷 夢津美、澁谷 勇人、渡邉 佳織
活動報告書編集 山田 颯生

UDCOD令和7年度活動報告書
ANNUALREPORT 2025

令和8年(2026年)6月発行

編集・デザイン　UDCOD事務局
発行　UDCOD
発行責任者　杉本洋文

本冊子の文章、写真、イラスト等の無断転用を禁じます

UDCOD

アーバンデザインセンター小田原 事務局

〒250-8555
神奈川県小田原市荻窪300番地
小田原市 都市部 都市政策課内
TEL 0465-33-1758